

県立農村総合研究所 ●

大原多目的センター

大原神社

大原観音堂

大原公民館

天神川

17

17

## ■四王寺（しおうじ）址・四王寺山

倉吉博物館は周辺整備中で休館だったが、偶々出てこられた職員の方に四王寺址への詳しい地図を頂けた。



途中、**不入岡**（ふにおか）**遺跡**（国史跡）が道の傍らに更地に残る。説明板あり。伯耆国府関連の施設・倉庫群。四王寺山登り口手前の丘陵も発掘中だった。

四王寺山（171.6m）は、伯耆国府や国分寺の北に位置する。山頂の四王寺址へは中型車なら通行できる林道があるが、登り口が少し分かりにくい。

### 四王寺（上図）・四天王信仰

奈良時代後半、新羅との外交関係が悪化する中、新羅と向かい合う太宰府、山陰・北陸諸国で四天王に対する新たな祭祀が執り行われるようになる。

宝亀五年（774）、太宰府の裏山、大野城内に四王寺（院）が建立される。「近年新羅がしきりに呪詛を行うので、これに対抗するために四天王像を造り、高地でかつ浄地を選んで安置せよ」というもの〔**類聚三代格**（るいじゅうさんだいぎやく）〕。

平安時代になると、貞観九年（867）には、伯耆・出雲・石見・隠岐・長門の五国に「八幅四天王像」を送り、「四天王に帰依し、災変を消却すべきこと」を命じている。これらの国々は「西極」にあり、境界は新羅に近いので、「賊境」を望む「高地」に道場を設置せよとの下命である〔**日本三代実録**〕。「延喜式」には修法料・供養料の規定があり、実際に機能していたようである。

トレンチによる発掘調査が行われ、堂周辺から平安時代～鎌倉時代の陶磁器が出土した。



「現在のお堂が建っている基壇は、

四王寺建立当初のものである可能性が高い。……お堂周辺の平坦地一帯に四王寺跡に伴う幾つかの施設などが存在すると考えられる」と推測されている。

お堂の裏手には展望台があり、新羅は見えなかったが、眼下に広大な景観が広がる（**上図は西方を見たもの**）。

## □岩井廃寺（国史跡） 鳥取県岩美郡岩美町

国道9号線（想定山陰道）を東へ。途中、**青谷上寺地**（あおやかみじち）**遺跡**（鳥取市）では古代山陰道址が発掘調査で検出されているが、今回は先を急いだ。

伯耆の東端、蒲生峠（335m）を越えると但馬になる位置に岩井廃寺が立地する。岩井温泉を過ぎたあたり、式内御湯神社の社叢が見える場所。遠望のみ。

南へ山を越え因幡国府へ向かえば、双塔伽藍をもつ**柘本廃寺**（国史跡 鳥取市国府町）が位置する。

峠を越え、湯村温泉の北側、岸田川左岸に**井土廃寺**（美含（みくみ）郡 現・美方郡新温泉町）が立地し、塔心礎が残る。山陰道・**面治**（めじ）**駅家**想定地。

## ■村岡民俗資料館

兵庫県香美町村岡。

明治27年（1894）

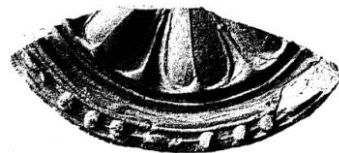
に建築された旧美方郡

役所を解体復元した資料館の展示品は出色である。

金銅装頭椎（かぶつち）大刀・金銅装双龍環頭大刀・金銅装馬具（文堂古墳）、石材に描かれた蓮華文（長者ヶ平2号墳）、耳杯型高杯（八幡山6号墳）、そして、**殿岡廃寺**の軒瓦など。古瓦散布地は寺河内集落の善性寺裏山の由。遺構は確認されてない。

軒丸瓦は、外縁に三重の圈線を作り、その上に3個一対の珠文を八組配置する（**上図**）。完形品も展示される。但馬で出土する「山田寺亜式」軒丸瓦のうち、最も北白川廃寺（山背）例に近いとも指摘される。軒平瓦の凸面には施文が見られる〔**参考文献を参照**〕。

村岡地域には**七美**（しつみ）**郡家**と**射添**（いそう）**駅家**が想定され、矢田川沿いを日本海に出れば**長見寺廃寺**（美含郡 香美町香住）が立地する。



## □法興寺廃寺 朝来市和田山町

住宅建設などに伴う発掘調査により、古新羅系の特徴をもつ軒丸瓦が出土している〔**右図**〕。

菱田氏〔**2013**〕は、「有稜八弁のもので、一見すると古新羅的な様相を示す。日本列島内

での伝播関係を示す資料もなく、直接的な伝播によるものと考えられる。時期的にも7世紀第3四半期としてよく、三輪君根麻呂〔**注**〕の帰国にともない、僧侶や技術者が渡来した可能性」を指摘されている。



## ■和久寺（わくでら）廃寺 福知山市

国道9号線を東へ。薄暮の頃、目的地の鹿島神社に到着。丹波国天田郡和久郷。境内には塔心礎が残る。寺域は境内周辺のほぼ一丁四方と推定される。3次の調査により、塔、金堂、僧坊、回廊、築地、工房址などの一部が確認された。和久寺址からは「山田寺亜式」軒丸瓦と顎部施文軒平瓦が出土した。

軒丸瓦の周縁には珠点と珠点との間に四本の縦棒からなる輻線文（ふくせんもん）がみられる〔**上図↑**〕。

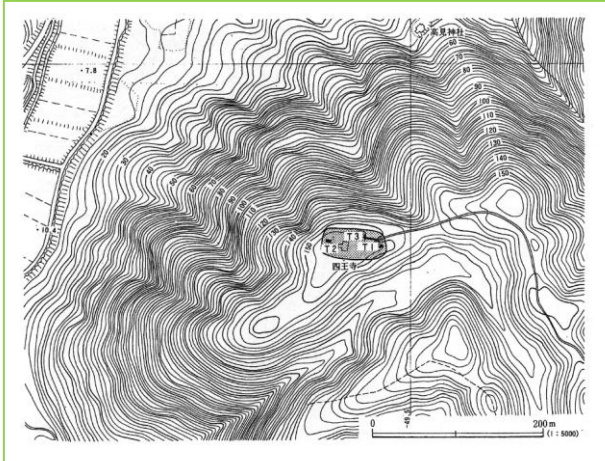
和久寺廃寺で予定終了。あわただしい一日で、走行距離、おおよそ500km、13時間だった。

＊引用・参考文献はむくげの会HPを参照下さい。



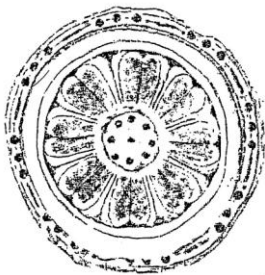
## ■引用・参考文献

史跡整備ネットワーク会議 山陰遺跡ガイドブック 4  
『山陰の古代遺跡～律令国家と風土記の時代～』  
倉吉市教育委員会 1999 『大原廃寺発掘調査報告書』  
倉吉市教育委員会 1995 「四王寺跡」  
『倉吉市内遺跡分布調査報告書 Ⅷ』

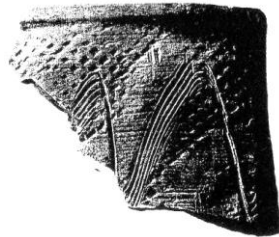


上記「報告書」より

中林隆之 2005 「護国経典の読経」  
『文字と古代日本4 神仏と文字』 吉川弘文館  
近藤 謙 2008 「古代の四天王信仰と境界認識」  
『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』 5  
両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001  
「殿岡廃寺」『北近畿の考古学』



單弁八弁蓮華文軒丸瓦



顎部施文軒平瓦

大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 2014  
図録『文堂古墳』

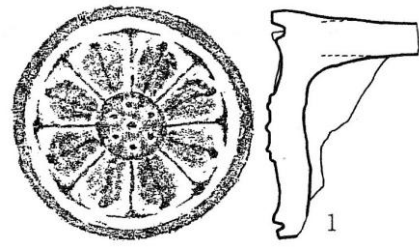


蓮が描かれた石材 ちょうじゃがなる 長者ヶ平2号墳 壁画か？

縦9cm・横18cm 周濠付近から出土  
中央に蕾、周囲に六弁の花弁か

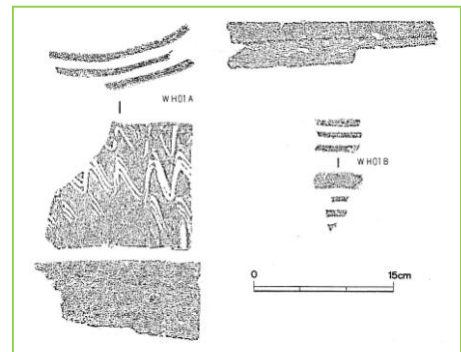
“但馬最古の瓦” 法興寺跡出土  
「但馬国府・国分寺館ニュース」10号 2007年

『法興寺跡』 和田山町教育委員会 1998年



素弁八弁蓮華文軒丸瓦

大槻眞純 1983 「和久寺跡 第1次発掘調査」  
『京都府埋蔵文化財情報』第7号  
京都府埋蔵文化財調査研究センター  
大槻眞純 1987 「和久寺の瓦」『京都府埋蔵文化財論集』  
第1集 京都府埋蔵文化財調査研究センター



菱田哲郎 2002 「秦氏の寺とそのネットワーク」  
『京都と京街道』 吉川弘文館  
菱田哲郎 2005 「山背の山田寺式軒瓦」  
『古代瓦研究 II』 奈文研・古代瓦研究会  
菱田哲郎 2013 「白村江戦闘以後、日本の渡来系寺院に  
みられる百濟佛教の影響—瓦當を中心に—」  
韓国国立扶餘文化財研究所主催学術セミナー  
前岡孝彰 2007 「但馬の古代寺院とその軒瓦」  
『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』  
寺岡 洋 2012 「伯耆・因幡の古代寺院を訪ねて」  
『むくげ通信』253 むくげの会  
寺岡 洋 2013 「加古川流域と山背・但馬—「山田寺垂式」  
軒丸瓦は語る—」『むくげ通信』258 むくげの会  
寺岡 洋 2013 「加古川流域の「山田寺垂式」軒丸瓦と  
顎部施文軒平瓦」『むくげ通信』259 むくげの会

【注】

三輪君（みわのきみ）根麻呂 百濟戦役に参加した将軍  
・『日本書紀』天智二年（663）三月条  
「中將軍（そひのいくさのきみ）三輪君根麻呂」  
\*救援軍27,000人を指揮した3人の将軍の一人  
・「粟鹿（あわか）大明神元記」  
神部直（みわへのあた）根マロ（門十牛）は、齊明天皇  
の時代に但馬国の民を率いて新羅との戦いに参加し、  
帰国して朝来郡大領（だいらょう 郡司）になった。  
『兵庫県史 史料編 古代1』 兵庫県 1984 p591  
\*式内・粟鹿神社も朝来郡に位置する